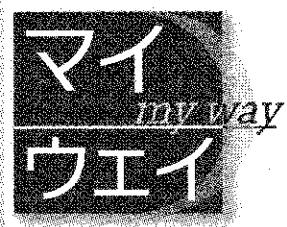


# 「南山」のPR

南山大学人文学部心理人間学科の専任教員でもある私は学科のホームページにも定期的に投稿するが、およそ6年前に「おすすめ情報」のコラムで自分の研究室の有様を紹介した。長い間にわたって自分で買った、人からもらったりした



南山大学学長 ミカエル・カルマノ 37

## あらゆる方法で情報発信

如月之恆

如日之升

如南山之壽

不鷲不崩

如松柏之茂

無不爾或承

南山学園の理事長室にある漢文の額縁

ぬいぐるみの数は120個になり、本かぬいぐるみかという、苦渋の選択を強いられていた。その時に選んだのは「手放して人にあげる」という道であった。学生や卒業生だけでなく、同僚の教員も協力してくれ、100個のぬいぐるみを送ることに成功したが、同時に「ものを持つ」ことについて色々考えさせられた。本当に持ちつづけたいものがあるとするれば、それは何であろうかと。

中学校や高校を訪問する個になり、よく見るのはスポーツ大会等のトロフィーが入っているケースである。先輩が勝ち取ったものとして校風に貢献するに違いないが、トロフィーを納める場所も必ず何か問題になるであろう。実は南山大学の学長室にも似たような状況がある。相手先の大学からもらった記念品は海外出張から帰る時の荷物になるだけではない。学長室の棚の空いているスペースを綺麗に埋め尽くすことにも貢献している。もうたいふ前のことであるが、インドネシアでの会議の最終日、空港に向かうバスに乗ろうとした時にももらった記念品はセメントでできたポロドゥール遺跡の大きな浮彫細工であった。ありがたい顔をするには少しだけ努力が必要だった。

このよつな経験を踏まえ、時々思う。人生の長い旅路なので、自分で拾ったり、人からもらったりする物（お土産、記念品等）は原則として食べ物がよいと、甘い物であれば、（脂肪と一茶）と、一匹の蛙の願望（これはまた別な意味だと言われても反論できないが、動き歩き続けければ解決できる問題である。しかし、自分はずっと持ち続けたいもの、というより、次世代のために残したいものとは何かと言つ問になると、そう簡単には答えられない。

南山学園の理事長室には大きな漢文の額縁がある。毎日のようにその中の「如南山之壽」を見て、持って行きたい、残したいものはやはりこのような言葉だ、と思った。「悠然として山を見る 蛙かな」（小林一茶）と、一匹の蛙の願望だと言われても反論できないが。